

〈近代本論第十五回：最初の対応——混乱と妄想と情報収集〉

参考文献

- ※『幕末政治論集』岩波日本思想大系 56
- ※福沢諭吉『唐人往来』岩波選集第一巻所収
- ※アーネスト・サトウ『一外交官の見た明治維新』上下、岩波文庫
- ※アルジャーノン・ミットフォード『英国外交官の見た幕末維新』講談社学術文庫

ペリーが来航し、ハリスが条約交渉を開始した時、幕府の老中首座、つまりトップは阿部正弘（1819～57）だった。その阿部が条約締結を前に急死した時、ハリスはこう記している。

〈1857年7月27日 阿部伊勢守が江戸で死んだということを聞いて、悲しく思う。彼は閣老会議の次席で（※実際は首席）、ひじょうに勢力があった。彼はつねに、わたしには偉大な叡智の人に思えた。彼は合衆国と他の西洋諸国の実力を完全に理解し、とりわけ、日本がいまや排外的政策を捨て去るか、それとも悲惨な戦争の中に投げ込まれるかの分岐点に直面していることを確信していた。彼の死は日本のリベラルな派閥にとっての大きな損失である。〉（ハリス、同上、中281p）

阿部はたしかに才能のある為政者で、わずか二十五歳で老中に抜擢されると（天保十四年＝一八四三年）、復帰を狙っていた水野忠邦や鳥居耀蔵の（天保改革（失敗）派）を一掃し、幕府の改革を進めていった。その動機の最大のものはアヘン戦争（一八四〇～四二年）であり、したがって外務、海防、軍事がその改革の中心となる。たとえば後年、勝海舟を抜擢して海軍創設を任せたのも彼である。そういう最中のペリー来航、ハリスとの交渉であるから、幕府のスタッフとしては、ある意味理想的な、全体を俯瞰できた政策の中心者であったことは間違いない。その政策の眼目は、一言で言えば、「時間かせぎ」ではなかったかと思われる。それは具体的な海防や軍事にとりかかるその本格的なプランニングと、バランスの人事によくあらわれている。

バランスというのはつまり開国派と攘夷派のバランスであり、具体的には開国派の急先鋒の井伊直弼（1815～1860）と幕府顧問に復帰させた攘夷派の象徴徳川（水戸）斉昭（1800～1860）との間の微妙なバランスをとることだった。このバランスは、

つまりは実質的開国に向けてのバランスであるから、やはり「時間かせぎ」のためのもので、彼の本来の意図はあくまで十分な軍事的、政治的実力を早急に備えることにあったと思われる。これが彼の急死で空中分解してしまった。彼があと十年長生きしていれば、おそらく開国攘夷の対立はあれほど激越なものとはならなかつただろうし、桜田門外の変もなく、生麦事件や下関戦争、薩英戦争すらなかつたかもしれない。

しかしまたその場合、日本の統一は別様の姿を呈したかもしれず（たとえば大政奉還止まりで、王政復古までいかなかつたかもしれず）、それはそれでまたまったく別の視界が開けたに違いない。これもまたこの奔流というしかない激動の時代に流されてしまった、「実現しなかつた可能性」だが、阿部はたしかに、幕藩体制最後の「全体的プランナー」と言える力量を兼ね備えていたと思う。彼が創設した講武所は近代式練兵を行うことで、長州奇兵隊と並んで日本陸軍の基礎をつくり（大村益次郎は両方に関係していた）、長崎海軍伝習所（奉行の勝を中心とする）は日本海軍の草創、そして洋学所は、後に開成所を経て東京大学を用意することになる。つまり近代国家の軍官僚教育制度のひな型を求めるとすれば、まさにそれは阿部正弘の行った「安政の改革」を原点とすると言わねばならないのである（しかしそう言った上で、こうした幕府中心の国家政策を支える財政基盤が、天保改革の大失敗によりすでに失われていたことも指摘しておかねばならないのだが）。

このすぐれた国家企画は、しかし空中分解に終わった。あとに残ったのは、開国派と攘夷派の激しい対立である。その中で阿部の思い描いていたであろう、合理的かつ大同的な開国の軟着陸も空中分解する。全体を見通せる為政者がしばらく皆無となってしまったからである。勝はすでに「国家主義」へと傾斜してその俯瞰的能力を発揮しはじめていたが、いかんせん一奉行であり、影響力はまだごく限られていた。かわって表舞台に登場するのは、強権論者の井伊と、観念論者の斉昭だった。その対立の中で、攘夷開国のイデオロギーもまた、強権化、観念化していく。一言で言えば、おそろしく素朴に、現実から乖離していくのである。その中でたとえば、ほとんど机上の空論としかいいようのない〈海防論〉の末裔も生まれることになった。一つは〈白兵戦論〉であり、もう一つは〈朝貢論〉である。もし阿部があと十年幕閣でありつづけさえすれば、こういう観念的空論はほとんど登場の余地がなかつたはずだが、ともかくそれがすでに維新の現実となっていた。したがってわれわれも（阿部の早すぎる退場を悼みつつ）、この観念的現実、あるいは現実的観念、どちらでもいいが、ともかく机上のキマイライデオロギーを検討しておくことにしよう。

〈白兵戦論〉というのは、つまり軍艦であろうが大砲であろうが、それは「卑怯にも」遠くから撃ってくるに過ぎない。いざ陸戦となれば、「百戦錬磨の」わが武士が白兵戦を制するはずだという議論だった。代表は攘夷の大御所（まさにそういうしかないお方）、徳川斉昭だった。

〈本文槍劍の儀、神国の長技たる事、申すに及ばず、近来試合の槍劍に至り候ては、其妙を極候。然るに蘭学者流の説行われ、外夷の戦艦、鉄砲の堅利なるに恐れ、所詮外夷には勝つ事能はざる様にものみ思ふ者なきにしもあらず。是其一を知て其二を知らずと言ふべし。戦艦、鉄砲は手詰めの勝負（※白兵戦のこと）に便ならず。〉（徳川斉昭〈十條五事建議書（嘉永六年七月）〉『幕末政治論集』所収、14p）

白兵戦なら武士本来の戦いであるから、まず陸地上陸させ、槍と剣で戦えばよいと続く。あまり呆れずに最後まで聞いてみよう。これはこれでなかなか面白いからである。なにが面白いかというと、もちろん老公の頭の中でおきている攘夷的イデオロギー化合なのだが。

〈仮令かの夷人一旦は辺海の地を侵^{おかす}といへども、上陸せざれば其欲を^{たくましゅう}逞^{たくましゅう}する事を得ず。我壯勇の士卒を撰^{えらび}、槍劍の隊を備へ、機に臨み変に応じ、我長技を以て彼が短なる所を制し、横合より突て出、或は敵の後より切て廻り、電光石火の如く血戦せば、彼夷賊原を塵^{みながろし}にせん事、^{たなごころ}掌^{たなごころ}の中にあるべし。されば神国の武士たらんものは、第一に槍劍の二技鍊磨せずんばべからず。〉(同上)

神国、武士、槍劍、軍艦と大砲の国難、この観念連合は、実に不吉な形で、敗戦直前の〈本土決戦〉論を先取りしていることに気づかされる。まだほんのわたしたちの両親の世代の現実が思い起こされる。カリスマ軍人だった荒木貞夫(1877~1966※長生きした人だ!)が思いついた〈竹槍三百万本論〉というのがまずあって(1933年)、それで本土防衛はできるということになった。そしてわたしたちの両親たちは実際に、在郷軍人会の「指導」で、まさに〈竹槍〉の訓練を強制されていたのだ。〈うちてしやまん〉のかけ声は、国体論者が掘り起こした、骨董的な記紀の〈久米歌〉である。そのナンセンスにして苛酷な風景は、すでにこの現実離れした〈御老公〉によって思い描かれていた。

またこういうこともある。最近NHKが幕末の日本の〈軍事力〉をテーマにしたドキュメンタリーをいくつか組んでいて、そこではペリーの再来航に備えてお台場が(つまり海辺砲台が)急造され、またいざという時には小舟に「てだれの武士」を溢れんばかりに乗せて、黒船を急襲するプランもあったとか。そのプランを自分のことのように自慢するアナや解説者の「すごいですねえ」の顔は、まさに十返舎一九の草子挿絵に登場する江戸顔そのものだった。きっと御老公はこういう愚民に向かって見栄をきっていたのだろう。

しめったところに暮らすと、雨が降り、キノコが生えてくる。その中には毒キノコも多い。したがって湿潤な日本で健康に暮らすためには(思想的に、イデオロギー的に健康に)こうした毒分のかなり多いキノコをそのつど摘み集めて燃やすしかない。その作業を少し試みてみよう。

実際に黒船は砲撃し、陸戦隊が上陸して白兵戦が起こった。下関戦争(1863~64年)の折である。パークスの右腕で、おそらく当時外国人としては最も日本語と日本の事情に通じていた通訳のサトウ(アーネスト・サトウ 1843~1929)も、青年らしい冒険心を刺激されて、最終段階の戦闘に参加し、相当に詳しい実戦記録を残している(『一外交官の見た明治維新』)。それを整理するところなる。

1. まず伊藤たちが和平に奔走したが、失敗する。
2. 四カ国連合艦隊は、海上からの砲撃により、ほとんどすべての砲台を沈黙させた。

3. 陸戦隊が組織され、上陸が始まる。規模はおよそ三千四百、対する長州の藩士はその半分か、もっとずっと少なかった。

4. 戦闘はほとんどすべて、射撃によって行われた。陸戦隊はあらゆる局面で長州兵を圧倒し、死者は十名より少なかった。長州側の死者ははるかにそれを上回ったようだが、正確な数字は残されていない。

5. パークスたちは、上陸して砲台のすべてを破壊することで満足した。長期的占領には兵力が足りないことを知っていたためである。

6. しかし威嚇は十二分に行った。再び伊藤たちが奔走した和平交渉では、賠償金を水増しするために、「破壊できた集落もそのままにしておいてあげた」という論理を用いる。当時の植民地戦争の実際が透けて見える論理なので、少し立ち止まってみよう。

〈わが方の人々が人家から発砲されている。したがってこの町（下関の町）を焼く権利は十分にあったのだが（！）、あえてそれをしなかった。ゆえに、下関の町に対する賠償金は、戦時における外国の慣例によって、しっかりと支払ってもらわないといけない。〉（サトウ、同上、上146p）

「戦時における」、とはもちろん植民地戦争の戦時であって、列強間のそれではないことに注意しておこう。普仏戦争がパリ近郊も戦場にしたらとあって、パリから発砲があった、しかしパリ全体を焼かずにしておいた、だからそれに値する賠償金を払えとビスマルクが強弁したとしたら、彼のキャリアもそこで終わっていたことは確実である。それが通用する〈ダブル・スタンダード〉が、もちろん植民地の現実だった。したがって、ここでは日本に〈植民地戦争賠償金〉が課せられていること、つまり日本はまったくアヘン戦争、天津条約における清国と同じ水準で扱われていることに留意しておかなければならない（なぜかこの点への目配りが維新史研究には伝統的に欠けていると感じる）。

連合艦隊はさらに、「もしヨーロッパ人が一人でもここで殺傷されたら、町を残らず焼き払うまでだ」と恫喝し、三百万ドルの賠償金、最大限の賠償金をせしめることに成功した。

つまり歴史は何を証明したのか。御老公のイメージした「白兵戦」は一度たりとも起きずに、当時雄藩として軍事にあれだけ力を注いでいた長州の惨敗に終わったということである。したがって「神国の白兵戦」、および「神風」的な天佑の妄想はここで、一度無惨な負け姿を晒していた。やはり阿部老中の講武所の方が正しかった。そこでは近代的な「号令」のかけかたから教練していたからである。サトウのような冒険家の文官ですら常識として身につけていた、「近代的陸戦」の概念、そのノウハウが、こうした観念論者にはまったく欠如していた。もう一歩いけば、「精神で弾丸を防ぐ」ということになり、これは義和団の「拳士」たちの妄想と重なる。それにごく近いところで御老公たちは机上の空論に興奮し、それを喧伝している。これもまた国体論の闇の歴史、その基底部に連なる問題でもあることを付言しておこう。

ともかく、観念論的、妄想的〈海防論〉は、こうした〈白兵戦〉含みで、幕末維新に蔓延することになる。福沢諭吉がその客観的な概観を与えてくれている。

〈外国と附合^{つきあい}始りてより、日本国中の学者先生と云ふ先生は、大概不^{のこらず}残海防策と云ふものを書き、種々様々の理屈を述立て、……大^{おおき}騷^{わざ}の話にて、其有様を見るに、何か外国と散々^{いくさ}師^しでもした跡で、まだ仲なほりも済まず、互に睨み合^あて居る様なり。〉(福沢諭吉『唐人往来』、選集1、81p)

福沢はここで斉昭の白兵戦論、お台場のこと、そして上に述べた〈急襲策〉(当時から喧伝されていたことがわかる)を羅列し、それらがすべて机上の空論であると断定するのだが、一つ面白いのはその同じ福沢が、当時征長論者であったことである(このことはすぐあとでまた触れる)。下関戦争はこの文章を書いている時(1865年)にはすでに終わっていたのだが、それは彼にとっては突発事であり、国と国との「附合」から生じたのではないという立場だろう。この立場にはまた独自の問題がないわけではない。しかしともかく、海防策はすでに手遅れであり、また復古的白兵戦論は百害あって一利もない暴論だった。そのことは福沢も正確に把握している。

もう一つのトポス、つまり〈朝貢誘導論〉は、攘夷側ではなく、開港論者に見られるのだが、負けず劣らず観念的で、妄想的である。平たく言うと、開港をして、しばらく様子を見て、じっくりこちらのペースに持ち込めば、それは貿易ではなく、朝貢に誘導することもできるのではないかというアイデアだった。つまり日本国の〈徳〉に、アメリカが、イギリスが自然になびいて、供物を自分から持ってくるという発想である。説明するだけで、なんだか情けなくなる気分だが、ともかく真顔で論じられていたのである。たとえば前節に登場した、通商交渉の相手方間部詮勝^{あまかた}(1804~84)がその一人である。あの苦渋に満ちた条約締結やむなしという文言には、それなりの現実感覚が見えたが、同じことはこの朝貢論には言えない。

〈条約再議年限の間、西洋各国に和親御取結^{おんとりむすび}に相成候はば、素より利欲に走る夷情、年を追って、御国に多分の品之無く、一同に其利を得候事能はざる事実を弁知致し候はば、是に於いて銘々奇特の懇儀^{おんぎ}を結び、独^{ひとり}自由の志願を起し申すべく、必然の儀に候得ば、其期に及び、漸々皇統至尊の徳を示し、神国清浄の風儀に懐け、自然と尊信の志を生じ、我より彼を御すべき御威勢に相成候上は、洋外諸蛮の大群も恐るべからず。中にも抜群に帰服致し、献貢の品を持来^{もちきたり}候時は、交易に倍して報ひ遣し候様御所置之あり候はば、交易の名を改、献貢として、諸品持来^{もちきたり}候国も出来申すべし。〉(間部詮勝〈上申書、安政五年十月〉『幕末政治論集』所収、108p f)

この短い文章の中に自家撞着が少なくとも三カ所見られ。まず「利欲に走る外国」が、日本の物産が少ないのでその利が得られないと、特別の待遇を求めて条約の改変を求めるはずだ、という主張。これはもちろんまったく根拠がない。ここでおそらく唯一現実に対応しているのは、日本の物産の少なさだが、開港当初の「夷狄の利」はもちろん金銀兌換率から生じる金の大量流出だった。その認識はここにはもちろん完全に欠如している。それが一つ。次はその利欲に走る列強が、どうしてか「皇統の至尊の徳」になびくはずだと

いう見通し。これが二つ。第三は、朝貢すれば貿易よりも倍の品物を与える、そうすれば向こうから「諸品」を持って来るはずだという見通し。持ってくればくるほど、日本は倍増しに貧しくなる。これで矛盾は極まる。

こうした初歩的という以上の撞着を、当時の為政者のトップの一人が重ねる原因は、妄想だが、しかし構造的な要因を持った妄想である。そのことには注意しなければならない。つまりそれは、農本と儉約令に明け暮れた幕藩体制の「徳治」（彼らの自覚における「徳治」）が必然的に生み出す妄想であったということである。ここにはイデオロギーという構造体の持つ、ある意味ですべてを覆い尽くす、「第二の現実の力」のようなものが垣間見える。今風に「仮想現実にはまってしまった」というと、少し分かり易くなるかもしれない。幕藩体制は、徹頭徹尾、貨幣経済の現実を無視する、そういう化石化した体制だった。そのまことに大きなツケが、ここに来て一気に噴き出した感がある。あまりに俗な総括かもしれないが、やはり「親の因果は子に祟る」こともあるのである。

「神国」、「皇統至尊」というジャルゴンも、すでに一般化していた。したがって開国派の幕臣も、この用語法に関しては尊王攘夷派と大差はない。そしてそれがまた、国体論という次なる仮想現実的イデオロギーをうみはじめることになる。いずれにせよ、同一の上申書に、国難をめぐるわりと正確な現実認識と、まったく非現実的な妄想が同居するところが、やはり時代の徴表なのではないかと感じる。

この朝貢論は間部の専売特許ではなく、この時代の為政者には共有された「一つの（望ましい）オプション」だった。それが分かるのは、間部とはずいぶんと立場も思想も違う長州藩の家老、長井雅楽（1819～63）が同じ論理で、「開国もやむなし」と藩論を統一しようとしたことである（有名な〈航海遠路策〉文久元年五月提出建議書において）。そこではこの論理は一つのクリシェーとして扱われ、開国を支持する見方の一つくらいの扱いにすぎないが、それでもそれがすでにクリシェーとしての一を得ていることに、やはり開国の最初期のすれちがい、つまり列強の現実主義（あまりに露骨な現実主義）と、こちらがわの（為政者の）観念論とのすれちがいを感ぜないわけにはいかない。

このすれ違いは、結局そのまま放置すれば、一方的に「向こう側の利」となるべきものだった。すでにペリーやハリスの恫喝論、その〈軍艦外交〉の中に、こうした〈アンシャン・レジーム〉の「狡猾な低劣さ」のようなものは如実に埋め込まれている。オールコックのあの虚構と現実を混同する「半未開人」の心象（偏見）を付け加えてもよい。

つまり何を言っているかという、すりあわせというもの、現実と観念のすりあわせというものは、現実感覚を持った人々の「自己啓蒙」として行われるしかなかったということである。植民地主義とはつまり強制された蒙昧主義であって、ダブル・スタンダードを常態とする文明化は、後進国の啓蒙とはむしろ反対方向に向かっている。それはこの開国のパラダイムをめぐるすれ違いにも如実に観察される基底的事実であった。

そしてさいわいにして、自己啓蒙ははじまった。まず外交の複雑な実態が理解され始め、そして国際貿易本来の互惠性が確認される。さらにまた情報の実効性が有識者（つまり多くは志士）の間で認識され、活発に収集され始めることになる。その過程を要約的に見ておくことにしよう。

まず外交の現実化は、雄藩において始まった。豪商トーマス・グラバー（一八三一～一九一一 彼は武器商人でもあった）が、長州藩に勧めて行った俊英の海外留学（いわゆる長州五傑）が大体その始まりで、急遽呼び戻された伊藤や井上（聞多＝馨）の、下関戦争や征長戦争時の活躍によって、その先見の明は証明された（もし松陰が望み通りにペリーと共に渡米していれば、この流れはもっと早く始まっていたら）。ついで五代友厚（1836～85）の薩摩での活躍が始まる。福沢諭吉はこうした現象を見て、幕府にも外交政策を行うべきだと献策している。上に述べた征長論の中にこの主張が登場する。

まず長州の留学生たちが、新聞を使って、「ゼルマン（ドイツ）のように同盟の諸侯」との条約締結を狙うかもしれないと警告を発する。それに対してではどうするか。幕府から進んで各国に公使を遣わすべきだと勧める。それが「同等の交際」の前提だと言うのである。これは当時としては、おそろしく先進的な発想だったことは間違いない。さらに福沢は現地の新聞を使った世論の操作にまで言及する。

〈殊に新聞紙の説杯は虚実難指定、其説を以確証とも難致とは申ながら、世間皆文を重んじ、其大論に由ては、一時政府の評議をも変じ候程のものに付、前段諸家より遊説の者共（※雄藩の留学生たちのこと）、新聞紙に力を用ひしは必然の義に付、弁理公使（※幕府の各国派遣の公使）御指遣の節は、新聞紙布告の義別段被仰渡、彼地に於て専ら政府の（※幕府の）御趣意を弁明布告いたし、大名同盟の説を（※薩土同盟や薩長同盟の風説を）論破候は勿論、此度長賊（※賊徒である長州の）罪状杯も、手を替へ品を改め、新旧の罪惡、些細の事までも条挙件説（※細かく挙げて一つ一つ論じ）、日々出版いたし（※出版し）、遂に世界中の人をして周く長州の罪を悪ましめ、……〉（福沢諭吉『長州再征に関する建白書』1866年7月頃、選集1-95p）

この建白書はなかなかの力作で、また諭吉の隠れた一面を伝えるものとして貴重な資料ともなっている。その一面とは、絶対主義官僚としての献策で、当時の幕府の政策可能性の範囲にあったかどうかは別として、主張のいくつかはこの新聞世論の操作に見られるように、非常に先進的、前衛的（かつ強権的）である。ここではたしかに諭吉の献策は、服部之総がそう見たように、「絶対主義的啓蒙」の枠内にびたりと収まる（しかし服部がそれを明六社の諭吉に見たのはアナクロニズムであり、誤りである）。条約締結から十年あまりも経たないうちに、こうした先端的な外交政策を献策した福沢はたしかにすでに「白兵戦」や「朝貢論」をはるか後ろに置き去りにしている。

この献策は、当時の幕閣でもっとも強硬派だった老中、小笠原長行（1822～1891）の元に提出された。長行は実際に第二次征長に参加し、九州で転戦したが、奇兵隊のために一敗地に塗れている。長行が福沢の献策通り、公使を派遣しようとしたかどうかまでは定かでないが、ともかくすでに幕府の外交使節は派遣されていた。文久三年（1863年）に派遣された、いわゆる「横浜鎖港」の交渉団である。開港したばかりの横浜を封鎖しようとするこの試みは、うまくいくはずもなく、逆に使節たちは下関の自由航行を確約する羽目になってしまった。そうした不手際を現地で見ていた、留学生組の藩士、五代友厚（1836～1885）はこう酷評している。

（柴田は（※幕府のフランス使節柴田日向守）至極の俗物にて種々愚説多く、幕府も簡様の人物を欧羅巴に遣すは、皇国の悪命（※悪名）にして、嘆息に堪へ申さず候。）（〈五代才助（友厚）書翰、慶応元年十一月〉、『幕末政治論集』所収、424p）

その五代は、すでに福沢と同じく新聞世論に注目し、ある新聞は主君島津久光をナポレオンにもあたる逸材だと褒めそやしていると嬉しそうに報告している（同上）。これはおそらくロッシュの幕府寄りの外交を批判するリベラル勢力からの反応だったのだろう。ともあれ、福沢にせよ、五代にせよ、急速に近代外交の要諦を学習しつつある、その姿がまことに印象的である。

では貿易そのものについてはどうだったのだろうか。開港から数年はともかく大混乱だった。それがひとまず収まり始めた時、貿易の意義そのものを彼らはどのように考えたのだろうか。

それを記録するのは、再び福沢である。当時写本として広く流布した『唐人往来』（一八六五年閏五月）中の主張が、ほぼ始めて国際貿易の利点を説いた分かり易い啓蒙書となっている。

この小論の成立事情もとても面白い。まず蚕書調所の同僚の神田孝平（1830～98、地租改正の立案者）が、まかないを任せていた老女に悩まされる。主人の職務にもかかわらず極めつけの〈唐人嫌い〉（外国人を当時は唐人と総称した）で、魚の値段が上がった、米の値段も上がった、酒も豆腐も高いと嘆く。すべて開港と唐人が悪いとくどき続けるので、神田はこれは面白い、この老女を納得させねば、開国論もなにもないと力こぶをいれて、諄々と説き続けたのだが、老女は頑として聞かなかった。すべて開国と唐人が悪いの一点張りで、神田もとうとうさじを投げ、福沢たち同僚に笑い話として披露する。そこで福沢は、「江戸中の爺婆を開国に口説き落とさんは愉快なり」と感じて、この小論を仕上げるのである。

立論のポイントは二つある。一つは開国によって列強から圧迫され、独立を失うという、あの「海防策」論者の妄想を打破すること。これはすでに見た。もう一つは、この老婆が嘆く「諸色高直」（諸物価の値上がり）が、相対的なものであり、また一過的なものだと例証をあげて説明することである。特に大きなメリットとして、養蚕が盛んになってきているのは、生糸の海外での需要が増大したからだと言った。これはさすがに福沢ならではの目の付け所で、実際に養蚕は急速に農村副業として、あの綿織物の打撃を補填する形で普及し始めており、これはまさに開港で世界市場と連結された産業の進展の一番分かり易い例だった（『米欧回覧』においても、使節団は各国での日本の生糸の評判を非常に気にしている）。貿易の基本は、無用の余剰を有用の必需品と替えるのであるから、そこには原理的に損得はなく、ただ互惠性だけがあると言う。非常に分かり易い正論である。さらに新しい市場に向けての生産が始まれば、「雇用」も確保されると、福沢はさりげなく指摘する（これも当時として最先端の経済論であったことは間違いない）。

もちろん列強の圧迫からの開国は近い過去であり、金の流出等の弊害が生じたことも福沢は知っている。しかし国際貿易は「時勢」であり、またその互惠性は、「世界の道理」

であるから、貿易によって列強の恣意を通すことは原理的に誤りであり、またそもそも不可能である。その好個の例として福沢はポルトガルを挙げる。ポルトガルはすでに小国だが、立派に独立を保っており、しかも貿易によって富み栄えている。

〈一と通り考へた所では、歐羅巴諸大国の中に斯る弱き国の独立し居たらば、方々より附睨はれて危うかる可しとこそ思はるれども、道理を守るものは外より動かしやうもなし。若し理不尽に之を攻取らんなどするものあれば、必ず之を救ふものあり。譬へば仏蘭西が攻めんとすれば英吉利が救ひ、露西亞が師を仕掛ければ仏蘭西が加勢を出すなどにて、手を出す者もなく、長き年月を太平無事に過せり。〉(同上、83 p)

これが実際の当時の国際状況からすれば、理想論であることはたしかだが、しかし「実のある」理想論であり、外国交際の根拠ともすべきものであることは間違いない。実際にしかし、ヨーロッパの小国、ベルギーやオランダ、そしてこのポルトガルは、ビスマルク的な意味での〈バランス・オブ・パワー〉を自覚的に活用することで保たれている国々だった。その構造論を論吉はすでに直感している(これがまた、『米欧回覧』での一つのテーマとなる)。

しかしでは〈ダブル・スタンダード〉の問題はどうなるのか。小国日本はヨーロッパの小国ではなく、アジアの小国である。だからこそ、と福沢は言う。だからこそ、日本は互恵的な(でありうる)国際貿易を最大限活用して、「欧羅巴風に見習ひて、蒸気船も沢山に拵え、大小砲も造立て、海にも陸にも備えと設ける」べきであると(同上)。つまり最終的な解決は貿易による富国強兵が与えることになる。こうして福沢の貿易論は、明治国家の青写真へと連続するのである。

かつてハリスは、こう説いた。

〈貿易に対する適切な課税は、間もなく日本に大きな収益をもたらし、それによって立派な海軍を維持することができるようになるだろう。そして自由な貿易によって日本の資源を開発するならば、莫大な交換価値を生ずるに至るだろう。この生産は、国民の必要とする食糧の生産を少しも阻害するものではなく、日本の現在有する過剰労働力を回すことによって振興するだろう。〉(ハリス、同上、下87 p)

しかしほぼ福沢の立論と同じ互恵論は、リップサービスでしかなかった。急転直下、それは軍艦外交の恫喝へと変容するからである。

〈諸外国はこぞって強力な艦隊を日本に派遣し、開国を要求するだろう。日本は屈服するか、しからざれば戦争の惨禍に陥ることになる。〉(同上)

それにそもそも、彼が最も力を注いだのは、「適切な課税」の阻止であった。ダブル・スタンダードがあくまで交渉の基本である。

したがって、福沢の互惠論は、国際貿易の主体化そのものであり、だからこそまた「不平等条約」の認識への出発点ともなるのである。ハリスと福沢はここで交錯し、そして右左に分かれる。

同じ主体的互惠論は、攘夷論から開国派に転じた頃の岩倉具視によっても直感されていた。

〈海外貿易ハ、寛永以来漢土、阿蘭陀ニヶ国ノ商船僅ニ渡来スル而已ニシテ、即チ鎖国ナリシモ、安政以来横浜開港ニテ、^{あめりか}、欧羅巴諸国の商船絶ヘズ往来シ、今又兵庫開港近キニ在ラントス。斯ク形勢一変スルトキハ、吾ガ皇国モ亦貿易ノ道ヲ講究セザル可カラズ。〉（岩倉具視〈濟時策〉慶応三年三月、『幕末政治論集』所収、500 p f）

もう攘夷開国を論ずる〈時勢〉ではない、「形勢は一変したのだ」という現実感覚がこの岩倉の献策の基底にある。すでに見たようにこれは志士に特有の変わり身、プラグマティズムであって、その素早いアングルの変化が、「貿易の道の講究」を可能にするのである。つまり主体性が、事態の把握を可能にする。

〈営利ハ素ヨリ外国習熟スル所ノ術ナリ。吾ガ皇国ハ今ヨリ之ヲ学バントス者ニシテ、其巧拙ハ雲壤ノ差アラン。所謂利ニ^{きと}諭ルモノハ（※利得をよく理解する者は）義ニ^{うと}疏ク、義ニ諭ルモノハ利ニ^{あに}疏キノ理ニシテ、豈尋常ノ事ニテ外国ノ右ニ出ヅベケンヤ。故ニ貿易ヲ要スルヲ以テ、商買ニ於テモ亦従前ノ如ク惟一家ノ利ヲ謀ルノミラ是レ事トセズシテ、富国ト云フコトニ着眼ス可キ様誘導セザルヲ得ズ。〉（同上、501 p）

営利において必敗の日本は開港の現実であった。しかしそこに〈富国〉という集団目標を設定することによって、営利性を越えた〈国民エートス〉を導入しようとするこの岩倉の発案は、すなわち明治政府の貿易方針の先取りであった。ほぼ同じころ、維新の中核にいた岩倉と幕臣ではあるが、在野に近かった福沢の二人が、ほぼ同一の国際貿易の主体的活用、それによる富国強兵、そして日本の独立国家としての青写真を描いたことは、大きな意味があると思う。それは植民地貿易の瀬戸際まで追いやられた幕末の日本が、統一国家の財政的基盤（の一つ）としての国際貿易というコンセンサスを獲得し始めたということであり、それははっきりと〈不平等条約の改正〉という明確な、そして全国的な目標設定によって、〈錦旗〉とは別の、新たな〈旗〉を手に入れたことをも意味しえたからである。

そしてそのことはまた、彼らの自己啓蒙を新たな次元へと導くことにもなった。それは政経の基礎を〈情報〉に置くという、素晴らしく近代的な発想である。これがつまり、開国パラダイムを、統一国家の青写真へと連続させる、最後の紐帯、不可欠のピースだった。このことを最後に概観しておこう。

そもそも維新幕末の動乱の一つの特徴は、未曾有の情報戦が展開されたことにあった。デマと真実がめまぐるしく入り乱れる。佐幕であれ、勤王であれ、リアルタイムでの情報収集、判断、時には進んでの操作が大きな意味を持った、そういう動乱の時代であった。

この中で、思いがけない情報のハブ、また後知恵ではあるが、納得のいくハブというものがある。前者の代表はイギリス公使付き通訳のアーネスト・サトウ（一八四三～一九二九）であり、後者の代表は勝海舟だった。両者が出会って緊密に情報交換を行い出した時、少なくとも列強における維新の評価（傍観ぶくみの中立を基調とする評価）は定まったと言える。

まずサトウだが、彼は若くして来日し、日本語習得に並々ならぬ熱意を注いだ。これはしかし例外ではなく、おそらくロッシュやパークスが通訳あがりの公使であることを最初から意識していたものと思われる。つまり植民地官僚特有の野心でもあった。しかしこの熱意は思わぬ形で報われることになる。彼が外国人としては特異に日本語を理解するだけでなく、日本的なものへの関心、感情移入能力、つまり総体的な交流能力に優れていることを知った幕臣や志士たちが、好んで彼と時事を語るようになったのである。

〈わたしは、日本語を正確に話せる外国人として、日本人の間に知られはじめていた。知友の範囲も急に広がった。自分の国に対する外国の政策を知るため、またはたんに好奇心のために、人々が江戸から（※横浜へ）よく話をしにやってきた。わたしの名前は、日本人のありふれた名前（※佐藤）と同じなので、それからそれへとよく伝わり、一面識もない人々の口の端にまでのぼった。両刀を帯した連中は、ワインやリキュールや外国の煙草をいつも大喜びで試し、また議論をととても好んだ。彼らは、論題が自分にとって興味のあるものなら、よく何時間でも腰をすえた。政治問題が、われわれの議論の主要なテーマであった。〉（アーネスト・サトウ『一外交官の見た明治維新』、上、194p）

ここからサトウはある感触を得る。つまり列強がこれまで将軍（大君）を中心に条約交渉を行ってきたことは、誤りであり、その背景に見え隠れするミカド（天皇）と直接関係を結ぶべきだという確信である。

〈訪問者の多くは、大名の家来だった。わたしは彼らの話から、外国人は大君を日本の元首と見るべきではなく、早晚ミカドと直接の関係を結ぶようにしなければならぬ、という確信を日ごとに強くした。〉（同上）

これはもちろんハリス、オールコックたちにもあの条約勅許の問題以来（1857年に表面化し、1865年によくひとまず解決を見た）、日本の二重統治には気がついて、様々なアプローチを試みてはいた。しかしオールコックの日本滞在記の表題が『大君の都』とされたことに端的に表れているように、二重統治はそれとして、ともかく大君＝将軍が直接の交渉相手とされてきたことは間違いない。勅許問題にしても、つまり将軍が勅許を得るかどうかは当面の問題であり、二重統治の不可解性は多くの場合、そのままにしておかれたのが常道であった。つまりこの意味では、サトウの総括は正しい。

〈わたしの想像では、当時の外国の代表たちは、大君を援助してミカドと大名から成る攘夷派に対抗させ、もし必要ならば大君をたんなる封建的支配者とするだけではなく、それ以上の支配者（※つまり君主）にしようと考えていたらしい。〉（同上、上94p）

この確信、つまり天皇との直接交渉の必要性の確信を強めたサトウは、とうとう匿名で一文を発表する。横浜の英字紙に発表したこの小論を、サトウは知人に手伝ってもらい、日本語訳してパンフレットとして配る。それは見る見る写本として広い範囲に流布し、とうとう海賊出版されて大変な評判となった。いわゆる『英国策論』（一八六六年）である。上司のパークスに断りなしに発表したこの論文で、イギリスは知らない間に朝廷派、薩長同盟派だとされるようになってしまう。

〈わたしは、条約の改正と日本政府の組織の改造を求めた。わたしの提案は、大君を本来の地位に引き下げて（※つまり国家元首扱いするのをやめて）、これを大領主の一人と見なし、ミカドを元首とする諸大名の連合体が、大君に代わって支配的勢力となるべきである、というものである。……しまいにはそれは、『英国策論』として、つまりイギリスの政策そのものであるかのように印刷出版されてしまい、大坂や京都のすべての書店で発売されるようになった。これは勤王、佐幕を問わず、イギリス公使館の意見を代表するものと見なされた。そんなことはもちろんわたしの関与するところではなかったのだが。〉（同上、上197p）

ここまでが、これから始まる特異な、そして非常に高度な情報戦の前提である。この小論、あるいはそれまでのサトウの持論が知られることによって、サトウは列強の、特にイギリスの〈情報ハブ〉と見なされ、維新の志士、それも最上層部の志士たちが、積極的にサトウに接近するようになるのである。その結果、ハブはますます構造化し、情報交換の中核としての実効性を証しはじめ、それによってさらに多くの志士がサトウに面談を求めるといふサイクルが生じることになる。

もともとサトウは伊藤や井上と懇意にしていた。これはしかし征長や下関戦争をめぐる彼らの通訳兼下交渉役としての任務と関係しており、一般的に「政治を論じる」ような関係ではない。また志士としても伊藤たちはまだようやく活動を始め、名前が知られ始めていたところで、木戸や西郷の比ではなかった。その西郷が、とうとうサトウの前に姿を現す（1867年1月）。それは兵庫の開港問題をめぐっての対面だったが、西郷の側にも、サトウの側にも、より大きな狙いがあったことが、サトウの記録を追っていくと分かってくる。

西郷はもちろん、サトウをパークスの代理、あるいは右腕として認めているのだが、対面の最初は（いつものように）口の重い西郷だった。

〈型のごとく挨拶をかわしたあとも、この人物は^{はなは}甚だ感じが鈍そうで、一向に話をしようとはせず、わたしもいささかもてあました。しかし黒ダイヤのように光る大きな目玉

をしていて、しゃべるときの微笑みにはなんとも言えぬ親しみを感じた。) (サトウ、同上、上226p)

サトウは、「ミカドおよび雄藩連合」の代表者としての西郷と対面していたのであり、したがってすぐに「主権問題」を持ち出す。西郷はそれには直接答えず、今問題となっている兵庫を自分たちに任せて欲しいと言う。

〈「兵庫に関する一切の問題は、五名ないし六名からなる大名の委員会の手にゆだねることにしましょう。そうすれば、幕府が利益を独占するために勝手な行動に走るのを防ぐことができます。兵庫は各藩にとってとても重要な港です。それは各藩がみな大坂の商人から金を借りているからです(※長期の大名貸しのこと)。この借財の支払いに、毎年藩の産物を大坂へ送らねばなりません。もし兵庫が横浜と同じような形で開港されるならば、藩の財政は大混乱に陥るでしょう。〉 (サトウ、同上、上230p f)

西郷の言う「大混乱」とは、外国および幕府、そして蔵元の相場の介入であり、これは開港以降の混乱を西郷たちがすでに正確に学習済であることを示している。しかし真に驚かされるのは、その言表の細かな外交的ニュアンスである。兵庫開港を列藩同盟に列強、特にイギリスが任せるならば、それはそのまま背景にある「ミカドの大権」の承認となる。それを西郷は含意しながら、逆に兵庫開港を幕府と列強の連携で行えば、列藩の権益、財政を大きく損ない、したがってその結果として不倶戴天の敵となりかねない、そのことを伝えているのである。これは通常、「重く茫洋な人」というイメージの強い西郷ではなく、まさにメリハリの効いた果敢な言動の人、志士の代表格である西郷の姿そのものである。そしてもちろん、西郷はこう言えば、そのニュアンスまで含めて、すべてサトウの上司であるパークスに伝わることを確信している。だからこそ別れ際に、これも前置きなく、「ハリ卿(※パークスのこと、この言い方も英国風そのものである)が何かわれわれに知らせたいことがある場合には、江戸の薩摩屋敷に通知していただきたい。そうすればわれわれは、京都からだれでも卿が望まれる者を差し向けるでしょう」とさり気なく言い残すのである(同上)。

すばらしい外交官に拍手。

ハリスは自分が押しつけた不平等条約が、その学習成果として、こういう交渉能力を十年足らずで生むとは夢にも思わなかったに違いない。

再び、その意外性に拍手。

西郷はサトウの「人品」にお墨付きを与えたい。これから以降、本当に核心的な部分での情報交換が始まるのである。つまりそれは、なんとイギリスの議会制度を廻っての情報収集だった!

これは西郷の面白い深読みから始まっている。つまり西郷は、イギリスが天皇と雄藩連合に好意を示し始めたのは、イギリス型の君主制を日本にも望んでいるからではないかと考えたのである。この時期、盟友の大久保にこう伝えている。

〈第一英国の所存は、日本国王、政柄を握らせられ、其下に諸侯を置^{おき}て、国体（※政体の意味であることに注意）の立方、英国にひとしき制度に相成候儀専一に願^{たてかた}居^{ねがいおりそうろう}候訳にて、此度も英国王より、日本国王えの書翰を幕府え差出候由、……〉（西郷隆盛書翰、1867年7月27日付大久保利通宛、サトウ、同上書訳注より援用、上44p）

この推定がどの程度正しかったかは別として、西郷は直ちに行動に移った。自分たちが〈国民会議〉を起こすことにやぶさかではないとサトウに伝えたのである。

〈わたしは京都の情勢を聞くために、西郷に会いに薩摩屋敷に行った。西郷は、現在の
大君政府の代わりに国民議会を設立すべきであると言って、大いに論じた。〉（サトウ、同上、上45p）

これは立憲の濫觴期の言動として非常に意味があるものだが、西郷の本音を推測すれば、おそらく国民会議ではなく、列藩会議を意味したのではないかと思う。しかし同時に英国の本格的な代議制にも深い関心を示した。そのため当時非常に近い位置にいた（薩土同盟の結果）後藤象二郎を再度サトウの元に使わして、議会制度の勉強をさせている。

〈夕飯のあとで、後藤（※後藤象二郎）が政治問題を論じに艦に（※サトウとパークスは大坂湾に停泊するイギリス軍艦中にいた）やってきた。彼は、イギリスを模範にして国会と憲法を(!)作ろうという考えを述べ、西郷もこれに似た見解をもっていると言った。そのことはわたしたちもすでに大坂で承知していた。〉（サトウ、下60pf）

西郷はおそらく、実際にイギリスの制度を調べ始めたのだと思う。つまりある種の〈敵を知り己を知れば……〉の実践だったのだろう。しかしこういう形で代議制度と憲法がすでに維新の志士たちの最上層部に知られていったことは、後の展開にとって非常に重要な意味を持った。たとえば議会制度には相当に懐疑的だったあの久保利通も、この時期は少なくとも情報収集に努めていた形跡がある（「大久保の頼みで、イギリスの議会制度と関連した行政府の機能、政党の存在、下院議員の選挙などについてできるだけいねいに説明した」とサトウは記録する）

実際に、当初の西郷と後藤の真意がどうであれ、後藤は特に代議制度と憲法に大きく共鳴を始め、それが結局、自由民権運動への導入部を用意することになる。サトウの同僚のミットフォードも、この後藤の自発的な関心と学習に注目した一人だった。

〈彼は（※後藤象二郎は）、後に維新の原動力となった三人か四人の有能な人物の一人となった。有名な薩摩の西郷や諸藩の指導者たちと同様に、彼は議事院、すなわち議会制度の創設を熱心に提唱していた。それは十八ヶ月後によく発足したが（※維新政府の右院、左院のこと）、創設当初はきわめて未熟なものにすぎなかった。〉（ミットフォード、86p）

維新政府の右院左院は、合議制で理解されるべきもので、さしあたり代議制とは無関係に見え、維新史もおおむねそう解釈してきたが、後藤や、その背景の西郷まで含めて考えると、これはやはり〈過渡的形態〉ではなかったかと思わせる節もある。それをミットフォードも見ていたのではないだろうか。

しかしこれはすでに立憲過程の初期形態にまで連続するので、いまはひとまずここまでとしておこう（最終章、第七章で再びこの問題に立ち戻ることを予定している）。

この活発なイギリスの制度に対する関心は、情報収集が主体で、それが学習へと進展していったわけだが（特に後藤において）、そこにはかすかにまた「情報操作」の狙いも見え隠れしている。それはイギリスの顔を列藩同盟と朝廷に向けさせるという意味合いのもので、たしかにサトウたちの言動を見ると、その効果がなかったとは言えない。

しかし最もシステムティックに、この情報操作を行った人物が一人いる。それは、やや意外かもしれないが、少なくとも維新過程の中心部にいたわけではない勝海舟だった。サトウは特に勝の正確な事実情報を珍重していた。明治に入ってだが、こう総括している。

〈一月十四日に、シーボルト（※アレクサンダー・シーボルト、日本から追放された医師スパイのシーボルトの長男。オーストリアとの不平等条約締結に「貢献」してフォンの飾りをもらった）とわたしは、一緒に勝の自宅を訪問した。勝は將軍家の崩壊以来、常にわれわれに政治情報を提供してくれた大いにありがたい人だった。彼は函館の徳川反乱軍は降伏すると考えていた。別れに望んで（※サトウは帰国を間近にひかえていた）、自分の脇差しをわたしに贈ってくれた。わたしたちはたがいに尽きせぬ名残を惜しみながら別れたのである。〉（サトウ、同上、下253p）

函館戦争は、ちょうどこの明治二年の初頭の時期、新政府軍の総攻撃が準備されており、非常に微妙な段階だった。それは榎本武揚の画策により、英仏が中立から一步踏み込んだ「事実上の政権」（函館政権）を承認したという噂が流れていたからである。これはパークスたちはすぐ否定したようだが、ともかく外交的に列強が中立するのか、介入するのか（居留民保護の名目で）は新政府の根幹に関わる問題になりかねなかった。そういう時に、かつて榎本の直接の上司であった勝が（海軍総裁、榎本は副総裁）、ついでのように「いや、彼らは降伏しますよ」と言ったわけであり、サトウはもちろんそれをパークスに伝えたはずだから、これは明確な情報操作なのだと思う。

勝の立場はすでに彼が標榜していた「国家主義」であるから、幕臣の部下に対する温情というよりも、やはり最近なされた英仏のミス、つまり現地政権を認証したようなポーズをとったことに対するやんわりとした批判を含んでいたと見るべきだろう。サトウが勝を情報源として十全の信頼を置いており、勝もそれを知悉していた故の、高度な情報操作である。高度なというのは、勝のこのコメントにはおそらく真情のみならず、事実性がしっかりと裏打ちされており、それもまたサトウは知っているがゆえに、情報の信憑性は著しく高まったことが推定されるからである。榎本たちは結局降伏せず、新政府軍は総攻撃を加えて勝利したわけだが、この勝の言表の背後にあった、「どのみち政府軍の方が圧倒的

に優勢である」というメッセージはパークスたちに正確に伝わったに違いない。彼らはこの時期からあと、目立った行動に出ていないからである。

これは歴史的細部の無駄な深読みではない。こうした情報の選択的提供は、勝の得意中の得意であった形跡があるからである。たとえば大政奉還（1867年10月14日）の直後、勝はサトウたちに「大君派（※将軍派）が事を早まった結果、内乱が勃発するおそれがあることを懸念している」と伝えた（同上、下82p）つまり大政奉還への反発としての王政復古クーデター、そしてそれに再度反発する慶喜方との内乱勃発までの流れを予想して、一言でこう伝えているわけだが、それをこの時期に伝える、しかも幕臣の最上層部（海軍総裁）として伝えることの意味は莫大に大きかったはずである。

たとえばまた、江戸開城と慶喜蟄居が決まった直後の三月に、サトウはお忍びで勝を江戸に尋ねている。これは最も信頼できる情報を得るためだった。勝はこう言った。

〈勝が話した中で最も驚くべきことは、二月に前将軍（※慶喜）の閣老とロッシュ氏が協議した際、ロッシュ氏はしきりに抗戦をそそのかし、フランス軍事教導団の士官連中も、箱根峠の防御工事やその他軍事上の使節を執拗に勧告したというのである。大体勝の意見では、自分と大久保一翁（一八一八～一八八八 若年寄、勝の上司）が二人の命を睨う徳川方の激情家の凶手を遁れることができさえすれば、事態を円満にまとめることができるだろうというのであった。〉（サトウ、下193p）

この情報を得て、パークスたちは結局静観を続けることにする。結果として戊辰戦争は終局に向かったのだ。こうしたベストタイミングでの情報提供もまた、勝の「国家主義」から出ていたことは、後知恵でだが、わかるところがある。つまり列強の介入をおそれたというより、もう一步踏み込んで、幕府の後ろにフランスとロッシュがいて、慶喜を積極的に助けようとしているわけだから（莫大な外債をちらつかせつつ）、そして薩長の後ろにはすでにイギリスがいることも勝は知悉しているわけだから、その内乱の可能性をいち早く伝えること、またその収束の可能性を保証することによって、「バランス」を期待したのではないかと思う。一つのヒントは勝が執拗にフランスの外債に反対し続けていたこと（『氷川清話』など）、つまり内乱の結果がどうころぼうが、新政府だろうが旧政府だろうが、ともかく借金まみれとなって実質的な国家の独立を失うことを彼は最も恐れていた。したがって、敵方ではあるものの、薩長の背後にイギリスが回り、しかし介入はしないことを期待していたのではないかと思う。ぎりぎりの期待だが、この時期にこういうせっぱ詰まった、しかし非常に正確な見通しを語ることには、相当大きな覚悟があったことが推測されるのである。

勝は同じような範疇のこと、つまり彼が後年ややアイロニカルに「大不忠の者が必要だ」（国家の安泰には必要だ）と言った、そういうほとんど幕臣としては「裏切り」に等しい情報提供を行っている。それは第一次征長の時、その幕府方の総参謀の西郷と初対面の折に、「幕府の内幕を言えば、もう駄目だ」と直截に述べたのである（『氷川清話』）。その結果、西郷は征長を徹底して行うという当初の目的を変更し、形式的な降伏で終えることになる（一八六四年）。これはほとんど幕末維新史を決定したと断言できる大きな分水嶺だ

ったのだが、その核心部には勝の「事実に基づく」情報提供があったこと、これはもっと注目されているのではないかと思う。

「事実に基づく」というのが決定的に重要である。勝は全集などを一瞥するとわかるのだが、おそろしく筆マメな人で、今風に言うなら「メモ魔」的なところがあった。自分の職掌である海軍関係はもちろん、幕府のあらゆる部門についての情報、統計を整理し続けたのである。これはおそらく行き倒れの流浪人から検校にまで経上がった男谷の家の血かもしれないが、それがまた蘭学的合理主義と化合融合していたことはほぼ確実であると思う。つまり事実の力というものを、軍艦の操舵においても、大砲の操作においても、彼は日々体験していたわけであり、その中から、「事実こそ人をもっとも動かす」という確信を得たのではないかと思う。そしてその「事実」は、百パーセント事実でありながら、なお操作が可能なのである。それも彼は直感した。つまり選択して伝える、伝える時期を選ぶという、もっとも基本的な枠を設定することで、この事実性はおそろしく説得力のある操作性へと通じるということ。それは最も高度な近代的外交の範疇に属する。

勝のこの「国家（生まれてくる国家）」に対する最大の貢献は、意外なことだが、あまりこれまで評価されてこなかったように思う。それはいわゆる勝好きの人々や研究者もそうで、すべてが江戸開城の「腹芸」に終始してしまうような趣きがあった。それはおそらく、ハリスたちが強引に設定した、〈アンシャン・レジーム〉の愚昧な狡猾さ、というイメージがどうしても残響のように幕府方につきまとったからではないかとわたしは感じる。根本の愚昧がどちらにあったのか、それはすでに論じた。そのハリスですら評価した阿部正弘老中の懐刀になるべき人材が勝であった（阿部がもう少し生きていれば確実にそうだったと思う）。その勝は、阿部が苦渋の末選択した開国開港と不平等条約の締結をすぐ傍から見続けていた。その大きな経験が、その大きな学習体験が、わたしはこうした高度の交渉能力、情報操作能力に結実したと考える。それはまさに、主体的開国と、近代国家の草創を告げる、隠れた大きな力の発現だった。

こう結論して、ペリー、ハリス以来の暗く蒙昧で低次元の時代を、より高邁な運動の見通しとともに、終えることにしよう。

あとは、学習を個々の学習から、システムの学習へと向上していくだけである。それはもちろんそれで大変な作業なのだが、最も困難な時期は、勝と西郷の幕末にあったこと、それはたしかだと思う。

(近代本論第十六回テキスト終わり)